

# 1 走れ

ハリウッド映画でよくある、派手なカーチェイスシーン。猛スピードの車から飛び降りたり放り出されたりして、地面に叩きつけられて転がっていく。と思うと、次の瞬間にはもう止まって、さっと立ち上がり、ほこりを払ったりしている。どうってことない、って顔して。そんなシーンを見るたびに思う。——ありえない。走っている車から放り出されたら、あんなもんじゃ済まない——。

僕は9歳のときに、走っている車から、かあさんに放り出されたことがある。あれは日曜日だった。なぜ日曜日だと覚えているかというと、教会で礼拝を終えて家に帰る途中のできごとだったから。子供の頃、日曜日といえば教会に行く日だった。行かなかったことは一度もない。かあさんはとても信心深かった。いまでもそうだ。筋金入りのクリスチャンなのだ。世界各地の先住民と同じで、南アフリカに住んでいた黒人も、入植者である白人が信じているキリスト

教を取り入れた。「取り入れた」っていうのは、要するに、押しつけられたってことだけど。入植してきた白人は、もともと住んでいた黒人にやたらえらそうな態度をとっていた。「おまえたち、救世主イエスに祈るのだ。必ず救ってくださるぞ」そう言う白人に、黒人は「そりゃあ、救ってもらわないと困る、ほかならぬあんたたちから。でもまあ、それはとりあえず置いておいて、そのイエスとやらを試してみようか」と応じたわけだ。

うちの一族はみんな信心深いけど、かあさんがイエス様ひと筋の熱狂的サポーターなら、おばあちゃんは、キリスト教も、子供の頃から身近だったコサ族の伝統的信仰も、どちらも信じていて、先祖の霊にも祈っていた。僕はずっと不思議に思っていた。伝統的信仰を捨ててキリスト教に鞍替えする黒人が多いのはどうしてなのか。だけど、教会へ通い、礼拝に出席しているうちに、キリスト教がどういうものか、だんだんとわかるようになった。ネイティブアメリカンが狼に祈るのは野蛮、アフリカ人が先祖に祈るのは原始的。だけど、水をぶどう酒に変えた若い男に白人が祈るのは、そりゃあもう常識でしょ、の世界なのだ。

子供の頃は、教会あるいは教会もどきに、週に少なくとも4日は通っていた。火曜の晩が祈祷集会、水曜の晩が聖書勉強会、木曜の晩が青少年教会で、金土はお休み(罰当たりなことをする日だ)。そして日曜日が教会で、正確に言うると、3つの教会に通っていた。なぜ3つも通うのかというところ、かあさんによれば、それぞれで得られるものが違うから、ということだった。ひとつめの教会には主を讃える喜びがあるし、ふたつめの教会では聖書の内容を掘り下げて

説明してもらえ。かあさんは聖書が大好きなのだ。みつつめの教会では情熱とカタルシスが得られて、精霊の存在を自分の中にしっかりと感じられる、と言っていた。この3つの教会を歩き来しているうちに、僕はある面白いことに気づいた。来ている人の人種がそれぞれ違うのだ。歓喜の教会は人種混在、聖書の教会は白人、情熱とカタルシスの教会は黒人だった。

人種混在の教会はレーマ聖書教会というところで、バカでかくて超現代的な建物の、いわゆる郊外型メガ・チャーチだった。当時の牧師、レイ・マコーリーは、元ボディビルダー。にかつとした笑顔を浮かべながら、神様を熱烈に支持していた。レイ牧師は1974年のミスター・ユニバーズ大会に出場し、3位に入賞している。このとき優勝したのが、あのアーノルド・シュワルツェネッガーだ。レイ牧師は毎週舞台に立ち、イエス様がいかにイケてるか、それは熱心に説いていた。座席はアリーナ式で、ロックバンドが最新のキリスト教コンテンツポラリー・ポッスをがんがん演奏し、それに合わせてみんなで歌う。歌詞を知らなくたって大丈夫。巨大ディスプレイにちゃんと映し出されているから。まさに、クリスチャンカラオケだ。この教会ではいつも、楽しいひとときを過ごした。

白人の教会はローズバンクユニオン教会。ヨハネスブルグでも白人富裕層の多いサンントン地区にあった。ここは僕のお気に入りだった。礼拝にでなくて済むからだ。かあさんが礼拝にでているあいだ、僕はここの日曜学校に出席していた。日曜学校ではすごいお話がたくさん読めるのだ。ノアの方舟の話はもちろんお気に入り。なにしろ僕と同じ名字の「ノア」の話なんだ

から。ほかに、モーセが紅海を割る話、ダビデがゴリアテをやっつける話、イエスがエルサレムの神殿で両替商を鞭で追い出す話も大好きだった。

家ではポップカルチャーに触れる機会がほとんどなかった。ボーイズIIメンなんて、家では聴かせてもらえない。女の子とひと晩中やっている歌なんて、とんでもない。そんなのタブーだ。学校ではかの子たちが「エンド・オブ・ザ・ロード」をよく歌っていたけど、僕にはなんのこともかさっぱりわからなかった。ボーイズIIメンという名前を聞いたことはあっても、どういう人たちなのかは知らなかった。僕が知っていたのは、教会で聴く音楽だけだ。イエス様を讃えて気分を高揚させる歌ばかり。映画もそうだ。かあさんは、セックスや暴力のシーンがある映画は僕の精神を墮落させる、と考えていた。だから、聖書が僕にとってのアクション映画だった。怪力サムソンが僕のスーパーヒーローだ。ロバのあご骨で1000人も殴り殺すなんて、すごいじゃない？パウロがエペソ人に手紙を書くあたりになると、話がこんがらがってくるけど、旧約聖書や福音書の面白さといったら。僕は、このあたりならどの章、どの節でも引用できる。白人教会では、聖書の内容に関するゲームやクイズが毎週あったけど、僕は誰にも負けなかった。

さて、黒人の教会だ。黒人の礼拝はいつもどこかでおこなわれていたから、僕たちはかたっぱしから行ってみていた。黒人居住区タウンシップならたい、野外テントでの伝道集会だ。僕たちがよく行くのは、うちのおばあちゃんが通っていたメソジスト派の集会だった。500人ほどの

黒人のおばあちゃんたちが、青と白のブラウス姿で、聖書を抱え、アフリカの容赦ない太陽に灼かれながらじっとしている。黒人の教会はきつかった。めちゃくちゃきつかった。エアコンはない。歌詞を映す巨大ディスプレイもない。おまけにいつまでたっても終わらない。少なくとも3、4時間はつづく。不思議でしょうがなかった。だって、白人の教会はせいぜい1時間ほどで、入ったと思ったらもう出てきて、じゃあまた、って感じだったから。なのに黒人の教会では、永遠かと思えるほどずっとそこでじっとしている。どうして時間がたつのがこんなに遅いんだろうということばかり考えていた。——ひょっとすると、時間って実際に止まるのかな。だとしたら、どうして白人の教会では止まらないのに、黒人の教会では止まるのか——。僕の結論は、黒人のほうが苦しんでいるから、イエス様との時間がたくさん必要なのだ、というものだった。「ここで1週間分のご加護をいただくの」とかあさんもよく言っていた。教会で過ごす時間が長いほど神様のご加護も増える、というわけだ。スターバックスの特典カードじゃないんだから。

そんな黒人教会にも救いがひとつあった。3、4時間という長丁場をなんとか乗り切ると、牧師による悪魔払いが見物できたのだ。悪魔に取り憑かれた人が通路をあっちこっちへと狂ったように走り出し、わけのわからないことを叫んでいる。教会の案内係が数人がかりで、クラブの用心棒さながらにタックルし、悪魔憑きを押さえ込む。牧師が近づいてきて、悪魔憑きの頭をつかむと、前後に激しく揺さぶりながら大声で言う。「イエスの名において、この悪魔を

追い払ってやる！」なかにはもっと手荒な牧師もいるけど、どの牧師にも共通して言えるのは、悪魔が出ていって、相手がぐったりとその場に倒れてしまうまでは、決して儀式をやめないことだった。相手が倒れ込まないとダメなのだ。倒れ込まないのは、その人に憑いている悪魔の力が強いということだから、牧師は一層激しく立ち向かわなくちゃいけない。相手がアメフトのラインバッカーであっても、関係ない。牧師は必ず相手がダウンするまでやめない。いやはや、楽しい見ものだった。

クリスチャンカラオケ、すごいアクション物語、猛烈まじない祈祷師。教会はもうホント楽しかった。楽しくなかったのは、そこへたどり着くまでの移動だ。それはそれは、つらくて長い道のりだった。当時住んでいたのは、エデンパークという、ヨハネスブルグからうんと離れた小さな郊外の町だ。そこから白人教会まで車で1時間、さらに人種混在の教会まで45分、そのあとまた45分かけて黒人居住区<sup>タウンシップ</sup>ソウエトの黒人教会へ向かう。これだけでも、もううんざりなのに、そのあとまた白人教会へ引き返して、夕方の特別礼拝に出席することもあった。夜ようやく家に帰り着くと、すぐベッドに倒れ込んだものだ。

走っている車から放り出されたあの日曜日も、いつもと同じ朝だった。かあさんが僕を起こし、朝食のおかゆを用意する。僕が歯を磨いたりしているあいだに、かあさんが弟の着替えを済ませる。弟のアンドリューはこのとき、まだ9カ月の赤ん坊だった。車に乗り込み、全員シートベルトを締めて、さあ出発、という段になって、車が動いてくれない。この旧式、おんぼろ、

ド派手オレンジ色のフォルクスワーゲン・ビートルは、かあさんがただ同然で手に入れたものだ。ただ同然だけあって、しょっちゅう故障していた。僕はいまでも中古車が嫌いだ。人生でうまくいかなかったことは、必ずと言っていいほど、中古車に原因がある。遅刻した罰で放課後に居残りさせられたのも中古車のせい。ヒッチハイクする羽目になったのも中古車のせい。かあさんが結婚したのだって、もとはと言えば、中古車のせいだ。こんな、ろくに動きもしないほんこつフォルクスワーゲンにさえ乗っていなければ、あの修理工のところへ行くこともなかったし、そうすれば、そいつがかあさんと結婚することも、僕の継父になることも、僕たちを長年苦しませることも、かあさんの後頭部に銃弾をぶち込むこともなかった。だから僕は、車を買うときは、ちゃんと保証の付いた新車、と決めている。

教会がいくら楽しくたって、白人の教会、人種混在の教会、黒人の教会と行き、そのあとまた白人教会へとって返す9時間にも及ぶ強行軍を思っただけで、うんざりした。車での移動でも大変なのに、乗り合いバスとなると、かかる時間も大変さも倍になる。このほんこつフォルクスワーゲンがどうやっても動かないとわかると、僕は心のなかで祈った。——どうか、今日はまだ家にいましょう、って言って。お願い、家にいましょう、って言って——。それからかあさんのほうをちらっと見ると、毅然とした表情が目に入る。腹を決めた顔だ。ああ、これから長い長い1日が待っている。

「さあ、ミニバスに乗りますよ」

かあさんは、信心深さも筋金入りなら、頑固さも筋金入りだ。一度腹を決めたら、もうおしまい。というか、車の故障のように、普通なら計画変更となりそうな障害があるとむしろ、こうなったらなにがなんでも行く、と頑になるばかり。

「悪魔のしわざよ」

かあさんは、車のエンジンがかからないとそう言った。

「悪魔が、教会へ行かせまいとしてるのよ。こうなったらミニバスに乗らなくちゃ」

僕がかあさんの頑固さを目の当たりにするたびに、その信仰心にはできるだけ敬意を払いつつも、逆の見方で反論を試みるのだった。

「そうじゃなくて、今日は教会へ行かないほうがいい、と神様がお考えなのかもしれないよ。だから、どうやっても車が動かないようにされたんだ。家で家族そろって安息日を過ごせるように。神様だって休んだ日なんだから」

「それこそ悪魔の思うつぼよ」

「そんなことないよ。だってすべてはイエス様の思し召しなんですしょ。だったら、僕たちはイエス様にお祈りしているんだから、車くらい動かしてくれたっていいじゃん。なのにそうしてくれない、ってことは……」

「違います！ イエス様はね、障害を与えておいて、わたしたちが乗り越えられるかどうか、



試されるときがあるの。ヨブがそうだったでしょ。これもきつと試されているのよ」

「ああ、そうか、なるほど！ でも、試されているのは、こうなったことを素直に受け入れて家において、イエス様のお考えを褒めたたえられるかどうか、ってことかもしれないよ」

「いいえ。それも悪魔の入れ知恵。さあ、行きますよ」

「でも……」

「トレバー！ スンケーラ！」

「スンケーラ」という言葉にはいろんな意味合いがある。「つべこべ言うな」「図に乗るな」「まだ言うか」といったあたりだ。命令であり、同時に脅しでもある。コサ族の親が子供に向かつてよく使う言葉だ。これを言われたら、話はこれで終わり、ということ。まだなにか言おうものなら、ひっぱたかれる。つまり、お仕置きとしてお尻を叩かれるのだ。

当時の僕は、メリベールカレッジという、カトリック系私学の初等部に通っていた。学校の運動会では毎年必ず優勝していたけど、かあさんも、親の部門で必ず優勝していた。理由は簡単、僕をひっぱたこうとして、しょっちゅう追いかけ回していたし、僕は僕で、ひっぱたかれないように、いつも逃げ回っていたからだ。僕とかあさんほど走った人間はほかにいないと思う。かあさんは「お仕置きするからこっちへ来なさい」というタイプじゃない。こっちへ無料配達で食らわせてくる。投げて寄越すことも多かった。手元にあるもの、なんでもかんでも投げ飛ばしてくる。それが割れモノなら、受け止めてそっと置かなくちゃいけない。もし割れて

しまったら、それまで僕のせいにされて、もっとお仕置きされてしまう。花びんでも投げつけられた日には、受け止めて、下に置き、それから走ることになる。一瞬の判断が求められるのだ。

——高価なものか、そうだ。割れモノか、そうだ。受け止めた、下に置いた、さあ走れ！——  
まるでトムとジェリーの追いかけっこだ。しつげに敵しい母親と、とんでもなくやんちゃな息子。スーパ―へおつかいに行っても、まっすぐ家に帰ることはまっすぐなかった。お釣りで、スーパ―のゲームセンターで遊んでいたからだ。僕はビデオゲームに目がなくて、「ストリートファイター」は得意中の得意。シングルプレイで何時間でも遊んでいられた。お金を入れたら最後、時間がたつのはあっという間だ。ふと我に返ると、ベルトを持った女の人がすぐ後ろに立っている。さあ、追いかけっこだ。近くのドアから飛び出すと、エデンパークのほこりっぽい通りを駆け抜け、塀をよじ登り、よその家の庭をこっそり走り抜けていく。このあたりじゃ日常茶飯事、みんなが知っていた。あのやんちゃ坊主がまた猛スピードで走って行って、そのあとすぐ母親が追いかけていったよ。かあさんはハイヒールでも全力疾走できるけど、本気で懲らしめようっていうときは、全速力で走りながら、履いている靴を脱ぎ飛ばす芸当までやってのける。足首がちよっと変な動きを見せたかと思うと、もう、ハイヒールが宙を舞っている。しかもスピードを落とすことがない。こうなると僕も覚悟を決めてかかる。——きたな、ターボモード——。

小さい頃はいつも追いつかれていたけど、大きくなるにつれて僕のほうが足が速くなると、

足では勝てなくなったかあさんが、頭を使うようになった。僕が走って逃げようすると、大声で叫ぶのだ。「生まれ！ 泥棒！」実の息子に向かってよく言えたもんだ。南アフリカでは、誰も人のことには口出ししない。ただし、リンチとなると話は別で、みんな寄ってくる。「泥棒！」と叫べば、とっちめてやろうとして、近所中の人たちが出てくるのがわかっているのだ。こうなると僕は、捕まえて取り押さえようとする知らない人たちのあいだを、かがんだり、潜ったりして、身をかわずはめになる。「泥棒なんかじゃない！ 息子だってば！」と叫びながら。

あの日曜の朝、混みあうミニバスに乗るなんてまっぴらだった。でも、かあさんに「スンケーラ」と言われた瞬間に、僕の運命は決まったのだ。かあさんがアンドリュウを抱き上げ、僕たちはおんぼろフォルクスワーゲンから降りると、ミニバスに乗るために歩きだした。

ネルソン・マンデラが獄中から釈放されたのは、僕がもうすぐ6歳になる頃だった。その様子をテレビで見たことも、みんなが喜んでいたことも覚えている。なぜなのかはわからなかったけど、とにかくみんなうれしそうだった。アパルトヘイトというものがあり、それがもう終わるということ、それがすごいことだという認識は、僕にもあったけど、その込み入った事情まではわからなかった。

はつきりと覚えているのは、そのあとに起きた暴動だ。アパルトヘイトを乗り越えた、この民主主義の勝利は、「無血革命」と呼ばれることもある。それは、白人の血がほとんど流れなかつ

たからで、黒人の血はいたるところで流れたのだ。

アパルトヘイト体制が崩壊すると、黒人による統治がはじまることは、みんなわかっていた。問題は、どの黒人が統治するかだ。インカタ自由党とアフリカ民族会議（ANC）のあいだで権力を争う暴力事件が次々と起こった。このふたつの政党間の政治的駆け引きはかなり複雑だけど、簡単に言うと、ズールー族とコサ族の代理戦争のようなものだ。インカタ自由党はメンバーの圧倒的多数がズールー族で、とても好戦的かつ民族主義的だ。ANCは多くの部族を抱える連立政党だったけど、当時の指導部のほとんどがコサ族だった。両政党は平和のために協力するどころか、非難しあってばかりで、信じられないくらい野蛮なことをいろいろした。激しい暴動があちこちで起こり、大勢の人が亡くなった。ネットレスと呼ばれるリンチは日常茶飯事だった。押さえ込んだ相手の首に掛けたゴムタイヤを押し下げて両腕の自由を奪い、ガソリンをかけて火を放ち、生きながら焼き殺すのだ。こういうリンチを、ANCもインカタも互いにおこなっていた。登校中に、黒焦げの死体を道端で見かけたこともある。僕とかあさんは毎晩、うちの小さな白黒テレビでそんなニュースばかり見ていた。十数名が死亡。50名が死亡。100名が死亡。

僕たちが住んでいたエデンパークからそう遠くないところには、トコザヤカトルホングと  
いった、イーストランド地域の黒人居住地が無秩序に広がっていた。どちらも、インカタ  
とANCの衝突がもっとも激しかったところだ。少なくとも月に1度、車で家に帰る途中、

このあたりで火の手が上がっているのを目にした。何百人もの暴徒が集まっているなか、かあさんは車をゆっくり進めながら、タイヤを積んで燃やしたバリケードをよけて通ったものだった。タイヤほどよく燃えるものはない。信じられない勢いで燃え広がる。燃えさかるバリケードの横を通り過ぎるときは、まるでオーブンの中にもいるようだ。僕はかあさんによくこう言った。「悪魔が地獄でタイヤを燃やしているみたいだね」

こうした暴動が起きるたびに、近所の人たちはみんなしばらく家に閉じこもっていたけど、かあさんは違った。堂々と出かけていき、バリケードのそばをじわじわと通り抜けながら、暴徒たちにこんな目を向けていた。——通して。わたしにはこんなくだらない騒ぎ関係ないんだから——。危険が目の前にあっても毅然としているのには、いつも驚かされた。目と鼻の先で争いが起きていてもお構いなし。かあさんにはやるべきことがあり、行くべき場所があった。車が故障しようが、教会へ行こうとするあの頑固さと同じだ。500人もの暴徒がいて、燃えさかるタイヤでエデンパークの道路が封鎖されていたって、かあさんならこう言うに決まっている。「さあ着替えなさい。わたしは仕事、あんたは学校へ行かなくちゃ」

「怖くないの？ かあさんはひとりきりで、相手はたくさんいるんだよ」

「ひとりじゃないよ。天使がみんなついてくれているから」

「そりゃあ、天使の姿が相手にもちゃんと見えていればいいけどさ。天使がついているなんて、あの人たちにはわからないと思うよ」

かあさんは心配するなと言い、モットーにしているお決まりのセリフを口にした。

「神様がついていてくださるなら、最強でしょ」

かあさんは決して恐れなかった。そうすべきだったときでさえ。

車が動かなかったあの日曜日も、いつもどおりの教会巡りをし、最後は白人のローズバンクユニオン教会だった。外へ出るともう暗くなっていて、僕たちのほかには誰もいない。ミニバスで、人種混在の教会、黒人の教会、白人の教会と移動して回る、とてつもなく長い1日が終わり、僕はくたくただった。少なくとも9時はまわっていた。暴力沙汰や暴動がいたるところで起こっていたあの当時、夜のそんな時間に外にいるもんじゃない。僕たちは、ジェリコアベニューとオックスフォードロードの角に立っていた。ヨハネスブルグ郊外の、裕福な白人居住区のだ真ん中だから、ミニバスなんて1台も走っていない。どの通りもがらがらだ。

「ほらね。だから、神様の言うことを聞いて、家にいればよかったのに」そう言ってやりたくてたまらなかったけど、かあさんの表情をひと目見るなり、言わないほうがいいと思った。かあさんに毒づいても平気なときもあるけど、このときはそうじゃなかった。

待てど暮らせど、ミニバスは1台も通らない。アパートヘイト時代、黒人が利用できる公共の交通機関はなにもなかった。だけど白人は、床にモップをかけたリトイレを掃除したりする

黒人には来てもらわないと困るわけだ。必要は発明の母だから、独自の交通機関として、黒人は非公式のミニバス路線網をつくった。非公式な団体による、完全な違法行為だ。誰かが統制しているわけじゃなくて、組織犯罪のようなものだった。各団体が勝手にバス路線を決め、ルート争いでよくもめていた。賄賂や不正はあとを絶たず、暴力事件も頻繁にあり、みかじめ料としてかなりの金額が動いていた。暗黙の了解はひとつだけ。ライバルの縄張りでこっそり営業してはいけない。そんなことをすれば運転手が殺される。統制してはいけないということは、まったく当てにならないということもある。来るときは来るし、来ないときは来ない。

ローズバンクユニオン教会を出たところで、僕は文字通り、立ち寝していた。ミニバスは1台も来そうにない。とうとうかあさんが言った。「ヒッチハイクするよ」歩いて歩いて歩いて、果てしない時間がたったように思えた頃、ようやく車が1台近づいてきて停まった。乗せてくれると言うので乗り込み、発進したと思ったその瞬間、突然ミニバスが目の前に現れて、行く手をさえぎる。

バスを運転していたブルー族の男が「イウィサ」を手に出してきた。イウィサはブルー族の伝統的武器で、要は長い棍棒だ。やつらはこれで相手の頭蓋骨を叩き割る。もうひとつ、やはりブルー族の男が助手席から出てきた。ふたりは僕たちを乗せてくれた男性を運転席から引きずり降ろすと、目の前に棍棒を突きつけた。「俺たちの客を盗るとはどういうつもりだ。なぜ乗せたんだ？」

殺してしまいそうな剣幕だ。そういうことが実際にあるのは僕も知っていた。かあさんが声を張り上げる。「ねえ、ちょっと、その人は助けようとしてくれただけなんです。乱暴しないでください。バスに乗りますから。もともとそのつもりだったんですから」こうして僕たちは、いま乗せてもらったばかりの車を降りて、ミニバスに乗り換えた。

乗っているのは僕たちだけだ。南アフリカのミニバス運転手は、たいてい荒っぽいギャングで、運転中に乗客に向かって文句を言ったり、延々と説教したりすることも悪名高い。この運転手は特に怒りっぽいタイプで、バスを運転しながら、かあさんに説教しはじめた。夫でもない男の車に乗るなんて、というのだ。知らない人に説教されて黙っているようなかあさんじゃない。運転に集中するように言った。ついコサ語が口をついて出たものだから、運転手の怒りが爆発した。ズールー族とコサ族の女性に関する固定観念には、根深いものがある。ズールー族の女性は行儀がよくて従順、コサ族の女性はふしだらな尻軽、と見られていた。いまここにいるかあさんは、運転手の宿敵であるコサ族で、しかも女ひとりでふたりの幼子を抱えている。おまけにひとりには混血児ときた。ただの売女じゃなく、白人の男と寝るような売女だ。「そうか、おまえはコサか。どおりでな。知らない男の車でも平気で乗り込むわけだ。まったく吐き気がする女だ」

かあさんはずっと言い返していたけど、運転手もひたすら罵倒し、怒鳴りつける。バックミラー越しに指をふりまわしたりして、どンドン高圧的になっていき、ついにこう言い放った。



「これだからコサの女は厄介なんだ。おまえらみんな売女だ。今夜は懲らしめてやるからな」

運転手は速度を上げた。猛スピードのまま走りつづけ、まったく止まろうとしない。交差点も、確認のためにほんの少し速度を落とすだけで、スピードを出したまま突っ走る。当時は誰もが死と隣りあわせだった。あのとき、かあさんはレイプされていたかもしれないし、僕たちみんな殺されていたかもしれない。どちらも十分ありえた。ところが、僕はそんな危険な状態だとはわかっていなかった。くたくたで、とにかく眠たかった。それに、かあさんはいたって落ち着いていた。かあさんがうろたえていないのに、僕がうろたえようがない。かあさんは運転手をとにかくなだめようとしていた。

「気に障ったならすみません、兄弟<sup>ブライ</sup>。このあたりで降ろしてもらえれば結構ですから——」

「ダメだ」

「本当に結構ですから。歩けますから——」

「いかん」

運転手がずっと飛ばしているオックスフォードロードは、どの車線もがらがらで、ほかに走っている車は1台もない。僕はスライディングドアに一番近いところに座っていた。かあさんは僕のとなりに座り、アンドリュウを抱いている。窓の外を見てから、僕に顔を近づけてきて小声で言った。「次の交差点でスピードが落ちたら、そのドアを開けるから。そしたら飛び降りるよ」